

三國名勝圖會卷之三十五

大隅國

贈嶽郡

敷根 本府の東方、八里半餘にあり、當邑は即ち敷根郷の内なり、敷根郷は、當邑と國分邑の内に係る、地頭館、敷根邑にあり、

山水

諸山合記 上之段村の内、長野谷山・平尾山等の山ありて、土人遊獵の所とす、此諸山、福山・國分に堺を接せり、

高橋川 水源は上之段村の地、及び福山牧野より出ず、敷根村にて海に入る、

若尊碕 地頭館より西方、十八町、敷根村にあり、此地は巖觜いわはなにて、西の方に向

ひ、海上に突出すること五町許、松林鬱然として、翠色映帶し、染るが如し、又此觜の海上一町許に、若尊礁あり、老松一株圍み八尺許蟠り、偃蓋愛すべし、其崑觜松林の中に石巖ありて、少し窟穴相穿てり、其中に神を齋ふ、若尊大明神といふ、祭神詳ならず。木像二体、此地海陸の風景共に佳勝にして、行人目を屬する所なりとす、又此海濱には、好石多く産す、其波潮の爲に穿たれ、或は窩穴を開き、或は峯巒溪、谷の如く、其景状奇なる者あり、且其石品も佳なるを以て、本府假山・剩水を好む輩、遠く舟に乗して来り、若尊石とて賞玩す、

つきやま

本藩に出る假山石は、若尊沖島、櫻島に隸く、瀧ヶ水帖佐脇元の海邊、等の産を以て、翹楚とするといふ、此若尊碕の地、東南の方、少は福山に屬す、

○ 若尊大明神社 前文に見ゆ、

◎ 獵りよう・・・獵(かり) ◎ 巖觜いわはな・・・觜(くちばし)

◎ 鬱然・・・草木の茂るさま ・物事の盛んなさま

◎ 翠色・・・みどり色 映帶・・・映り映えるること

◎ 偃蓋(えんがい)・・・伏せた笠 笠の形をした松 笠松

◎ 穿てり・・・穿(せん)うがつ 穴をあける つらぬく

◎ 齋ふ・・・心身を清める いつく いわう

◎ 峯巒(ほうらん)・・・山の背 小さくとがった山

◎ 隸く(つく)・・・付く つき従う

◎ 翹楚(ぎようそ)・・・多くの中ですぐれた者

神社

劔大明神社 地頭館より戌方、三町 敷根村にあり、社地方一町半許、松林森然たり、泰祀韓國神社、曾祭日本武尊、本田親盈隅州神社考、是に同じ、勸請の年月詳ならず、本社より丑寅の方六七町に劔巖といふ峭巖あり、峩々として層立す、劔嶺又日本嶽、或は字豆の峯ともいふ、劔巖の背を琵琶の甲といひ、劔巖の下を劔が崎といふ、當社は舊其巖頂にありて、石祠立ち、ほころ拜殿は巖下の平地にありしとぞ、劔下明神の稱は劔嶺の上に、勸請せし故なるべし、然るに延寶元年、癸丑、十二月、今の地に遷宮せり、韓國神社は、國分上井村宇豆峯の麓にあり、國分の卷に詳なり、想ふに此地劔巖を、或は宇豆峯と云ふは、國分宇豆峯に擬するの稱なるべし、此社は、古より當邑の宗社なりといふ、然るに敷根氏、敷根氏は、猶下の城址に見はず、當邑を領せし時、當邑天滿神社を崇敬して、宗社とせしより、世々誤り來りしと見えて、寛文十年、十一月九日、官より地頭桂式部へ命じ、當社を總鎮守とす、敷根氏の時、天滿神宗社たりし事は、其令書の内に見ゆ、又當郷土猿渡仙右衛門家藏の、劔大明神由緒記を按ずるに、古來敷根宗社の故、貫明公特に御崇敬あり、山田利安へ命じて、再興し給ふ、先是敷根氏領地の時、天滿神社を崇信し、諸人宗社の如く尊敬して、祭祀も亦是に準じ、今に至りて亦然り、是に因て、劔の社自然哀廢しねと載たり、此文に據れば、天神社に尊信深きを以て、其勢ひ自ら宗社の如くなりしにや、例祭正月中丑日・十一月初丑日、社司瀬戸口氏、

◎戌方・・・西北西

◎丑寅・・・北東

◎峭巖・・・高く険しい岩

◎峩々(がが)・・・山の高くけわしい

◎舊(きうく)・・・久しく年を経る　むかし　ふるき時代

◎勸請(かんじょう)・・・仏の靈を別の場所に迎えて祭ること(菩薩本行經)

神仏の降臨を請い願うこと

◎延寶元年・・・一六七三年

◎宗社・・・宗廟(祖先のみたまや)と社稷しやしよく

「社」は土地の神　「稷」は穀物の神

◎按ずる・・・おさえる　くだす　あげる

◎貫明公・・・島津義久

豎山大明神社 地頭館より卯方、二里餘、上之段村にあり、祭神詳ならず、元歴元年、甲辰、熊谷但馬守宗直、奥州桑井津より、虚空藏菩薩を護し下りて、此所に勧請崇敬せしといふ、即ち寛文九年、寶曆十二年、兩棟札の背に、奉造立豎山大明神社一字云々、奥州桑井津福園虚空藏、爲氏守神、奉信心、當國御下向、平氏朝臣熊谷但馬守、元歴元年、甲辰云々と記す、社司曰、虚空藏といへば佛なり、何の頃より、此の如く神號に改けるをしらずと、今其虚空藏なし、鏡を以て神體とす、社殿の前に、宗直住せし宅地の跡あり、今農民多持門の名頭次郎と云者、是に住す、此次郎先祖は、即ち熊谷に従ひ來れるといふ、代宮司平藏先祖も、同じく然りとぞ、平藏家に、三尺餘の刀を藏む、熊谷此所に來りし時、與五郎といひし者に、其刀を帶せ、神體を負はせたりといふ、與五郎が後裔、今助左衛門といひ近頃までは脇差もありしに、内之浦邑土神崎喜三右衛門是を請得て、家藏すととなり、喜三右衛門は、助左衛門家族なりとぞ、例祭二月十三日・九月七日、社司は瀬戸口氏、

神社合記 北辰社 敷根村にあり、神體は樟樹なり、其樹圍三丈九尺餘、社殿一字、神樹を去ること二十四間餘、林叢の中にあり、俗に北辰山といふ、例祭六月朔日・十一月中丑日、△天満神社 同村にあり、例祭九月二十五日・十一月二十五日、慶長七年棟札に、奉行山田越前入道有信と誌す、上文敷根氏の時、宗廟たりしとは、此社なり、△飯富大明神社 上之段村にあり、社地方半町許、林叢あり、木傳五体、二月初甲日・九月九日・十一月初甲日、川田駿河奉納せしとて、軍法加持の書あり、黒漆竹筒に藏む、其書中、大率敵を降伏するの咒文・印相を記す、

◎卯方・・・東方

◎元歴元年・・・一一八四年
げんりやく

◎寛文九年・・・一六七〇年

◎寶曆十二年・・・一七六二年

◎咒文（呪文）・・・まじないの文句

三國名勝圖會

旧薩摩藩領の薩摩・大隅及び日向（一部）の三國の自然・寺社・物産などについて記述した編纂物。全六十卷。一八四三年（天保一四）藩主島津斉興のころ、五代秀堯を総裁とし、橋口兼柄、五代友古らが藩命を受けて編纂した。かつて「薩藩名勝志」があったが、もれた点が多かった。薩藩には、名勝・旧跡・物産など多くの勝れたものがあるので・それを世間に知らしめるために編纂された。（鹿児島百科事典より）

佛寺

福如山常光寺蓮持院 地頭館より卯方六町

敷根村にあり、本尊愛染明王、開山明濟法印、時代詳ならず、本府大乘院の末にして、真言宗なり、開基年月

壽永山瑞慶寺 地頭館より戌亥方、五十間詳ならず、當邑の祈願所なり、

敷根村にあり、本府福昌寺の末にて、曹洞宗なり、本尊阿彌陀如来、開山大騾和尚、寺第二の往特、慶長十三年、戊申、九月遷化、當邑の菩提寺なり、本堂に貫明公の御靈牌を安置せり、寺傳に云、當邑士兒島清鏡、貫明公に近侍し、御側醫師、ご逝去の後、老に及び風雨を厭はず、國分龍昌寺に日詣懈らず、公の御女子、於平姫、清鏡が忠厚なるを感じ給ひ、御靈牌を當寺に御安置ありて、清鏡が勞を休め給ふといふ、

藥師堂 地頭館より丑寅方、十二町、敷根村、日州通道、門倉の北側にあり俗に門倉藥師と呼ぶ、石階半町許、曲折して登る、茅堂一字、南に向ふ、藥師堂の三字を扁す、天井蟠龍を畫く、本尊木像を安ず、高さ三尺許、此像は、傳教大師の作にして、本藩三州の内、三藥師の一なりといふ、三藥師とは高岡法華嶽寺の藥師・帖佐米山の藥師・此藥師なりとぞ、左右に日光・月光・十二神を置く、古來安置せし像は、何の頃にや、人あり盜去りしとぞ、是に依て、日州諸縣郡高城邑宮原村佛工彫刻寄進せり、天明卯十月と記す、此堂後は揚之山に據て、地形高敞なり、西南の方には、水田海上を目下に望み、風景清奇なり、境内古木蒼然たり、堂後に大杉樹一株あり、神木と稱す、枝葉繁茂して、雲に參る、蓋し數百年の物なるべし、此堂の縁起を按ずるに、漢土明國浙江寧波府定海縣の董十八官 其名詳ならず、本藩に歸化せる人なるべし、建立せり、其年月は傳はらず、堂宇の製、甚莊嚴なりしに其後傾倒せしを、董某の子高石孫三郎、此人、姓名を國俗に改しなるべし、邑主敷根備中守頼兼と、志を同じして、天正四年、丙子、十二月二十三日、再建せしを誌す、慶長四年、莊内伊集院忠貞を御征伐の時、兵士此堂に集り、各其志を述て、文句を前後左右の板壁等に題しける、其内平田三五郎宗次は、姿容秀麗にして、美少年の名高かりしが、年十六にて從軍し、此堂に來りしに、衆人既に題書して其板壁の低き處は書すべき隙なかりければ、家丁けらいに捧持せられて、其最高の所に自詠の和歌を題しける、

其歌に云

かき置は片身ともなる筆の跡

我は何くの土となるらん

かくて宗次は、莊内の役に戦死しける、其板壁は衆兵の題書長く残りし故、本府侠少年の徒、遠路を歴て來り見る者多かりしとぞ、就中にて平田宗次が題詠を見る、老少となく皆感泣を催しけるとかや、然るに往時瑞慶寺より、堂の内外都て黒く塗りければ、今は片言隻字も見えずとなり、此題書は、古風なる者なりしに、誠に惜むべき事と謂つべし、この薬師古來靈佛の名高くして、信心の徒靈驗奇特の不思議往々ありとて、當邑は論なく、他邑より常に參詣し、特に毎年六月八日は、藩俗の六月燈を施行し、諸方より群詣して、頗る闊然なりとぞ、此堂は瑞慶寺の所管なり、

○薬師の水附薬師の瀑 薬師堂の後、七八間許にあり、清水大石・巨巖の間より湧出し、水勢甚盛なり、薬師水と號す、堂より八九間西にて瀑水となり、懸崖より瀉き落つ、其懸崖は滑り石にて、高さ五間許、濶さ一間半程あり、薬師瀑といふ、下流は高橋川に入る、此薬師水は、性品絶佳にして、其味清美なり、百病を愈すとて、病患の徒、常に汲み飲む者多しとかや、

◎丑寅・・・北東

◎十二町・・・一町（六十間 約一〇八メートル）

◎蟠龍はんりゆう・・・とぐろを巻いている龍 　まだ天に昇らない龍

◎天明一年・・・一七八〇年

◎高敞たかしやう・・・土地が高く開けていて見晴らしがいい

◎董十八官とうじゅうはちくわん・・・役人

◎天正四年・・・一五七六年

◎慶長四年・・・一五九九年

◎隻字せきじ・・・一つの文字 　わずかな文字

◎奇特・・・特に勝れていること 　たぐいめずらしいこと

◎闊然（どうぜん？）・・・さわがしい 　にぎやか

舊跡

長尾城 地頭館より卯方、二十四町、敷根村にあり、天險の山城なり、四方巖壁峭立して、高低あり、高さ凡そ百二十間、城上の周廻二十一町許、本丸・西城・三丸の跡あり、本丸と三丸との間、東北の方、半は山形分れて、溪谷相通ず、其谷に水泉瀉き出づ、下流は舟川といふ、又本丸の中に、若宮石祠あり、又城上に諸人宅地 四周に竹を植て牆とす、其竹方言金竹と云るものなり、及び馬場の跡等残り、當城は、往古敷根氏世々の居城なり、其祖土岐國房、敷根を領し、國房の子頼房、始めて敷根を以て氏とす、國房より第十四代頼賀が時、適地肝屬氏等の衝に當り、疆界を守り、防戦すること凡そ二十餘年、遂に當邑を全す、天正三年、貫明公頼賀の忠勞を賞して、隅州春華 今重富の内、益田 帖佐の内、の地、千石を加へ賜ふ、既にして文祿三年、豊太閤の命にて本藩田地丈量の事あり、於是四年垂水の地田上に易封せられ、頼賀其家臣を從へ移る、敷根氏の裔胄、今市成邑主島津石見久浮是なり、事は市成に詳にす、敷根氏世々の基なりとて、當城の南麓にあり、杉林の中三面に石牆を築き、六地藏石塔一基ありて、銘文を刻す、天明丙午の年、第二十三代の孫、島津仁十郎久芳、祖先の古墓崩頽せし者を、一所に集合して、六地藏を建立し、冥福とする旨を記す、

○**繩掛松** 長尾城大手口の下にあり、此松より西を外圍、東を内圍と唱ふ、往昔城中の人民、八月十五夜、繩を以て松に掛て、外圍・内圍の人数、二ツに分れて繩を引き、勝負を論じて遂に争死に及べりとぞ、今に至て八月十五日は、此所に怪異ありといへり、其松兩股ありて大木なり、

○**陣の崖**^{ひら} 長尾城大手口の西にあり、城の取添なりとて、塹^{ほり}の跡あり、本丸に通ずる路あり、清水郷土有馬勘右衛門家藏文書の内、肝屬氏敷根口へ侵せし時、取添の本口にて、有馬半六左衛門戦死す、其時の地頭、村田越前守に戦功ありと見えたり、取添の本口とは、此邊の事なるべし、

桂姫城 地頭館より卯方、一里半 上之段村の地、長野・谷山・平尾山に間にあり、長野谷・平尾、兩山を桂之尾と呼ぶ、上古桂姫居城なりしといふ、山下より溪谷に傍ひ、林木の間を登降曲折すること數町にして、山間梢丙なる所を得、是を城跡とす、其丙所に一奇樹あり、かつら木といふ、高二丈四尺、圍一丈二尺、其土根より百千の枝生ず、因て千本木とも呼ぶとなり、土人云此木他所の地にも、更にあることなく、只一樹のみなりといへり、又靈樹

なりとて、伐取ることを禁ず、古へ 神功皇后三韓國を御征伐ありし時、
桂姫従軍して武功あり、 皇后因て桂姫を賞して、名を勝浦姫と賜ひけ
り、是より武家に勝浦姫の後を愛慕して、當國にも前代勝浦姫の妹一人召さ
れ、敷根へ宅地を賜ひ、居住せしめられたりといふ、此所其舊址なるべし、
又城後の峯を、桂のみねといふ、

觸ヶ野 地頭館より寅卯方三里三町餘 上之段村にあり、其地廣の高岡あり、莊
内の役に、陣觸ありし所といひ、又狼煙を揚し所といふ、爰に狼煙を揚げれ
ば、國分の城に續て立、又鹿兒島吉野の上に續くとなり、

物産

土石類 假山石 敷根村若尊碕に出づ、

飲食類 鹽しお 邑内鹽田ありて、甚廣し、邑民産業の大半となるといふ、

△煙艸 當邑は國に隣る故に、煙艸の性品、國分産に相類して、上品なり、所
謂國分五所・八所の産にも鬚鬚たり、其名品に、羽白・源ヶ島といふ二種あ
り、

藥種類 枳殼 △瓜窠實 △茯苓 △柴胡

飛禽類 鶉うすひ △雉

走獸類 野猪

鱗介類 帶魚 鱒あじ 火歩魚方言、

◎墻 (しょう)・・・かき さかい 境界

◎疆界 (きょうかい)・・・さかい 境界

◎天正三年・・・一五七五 ◎文祿三年・・・一五九四

◎裔胃しそん (えいちゆう)・・・遠い子孫 血筋

◎天明・・・(二七八一〜一七八九年)

◎崩顔 (ほうたい)・・・くずれすたれる ◎陣觸・・・陣地(？)

◎爰こゝに狼煙・・・のろし (狼の糞を用いると風が吹いても煙は真っ直ぐあがる)

◎煙艸・・・たばこ ◎鬚鬚・・・彷彿 よく似ている そっくり

◎枳殼 (きこく)・・・からたちの実を乾かして作る薬品

- ◎ 瓜からすうりのみ 竄實・．．． 窶（ろう） 窶（ろ） しろよもぎ
- ◎ 茯苓（ぶつりょう）．．． 松の根に寄生するきのこの類（薬草の名）
- ◎ 柴胡・．．．（さいこ） 藁草 のぜりの異名
- ◎ 帶魚・．．．うなぎ（？） 太刀魚（？）
- ◎ 火歩魚方言・．．．ひばかした魚（？）

※ 原文を忠実に書き写しましたが、漢字がなくて現代の漢字に替えた部分が若干あります。**敷根研究の参考になれば幸いです。**

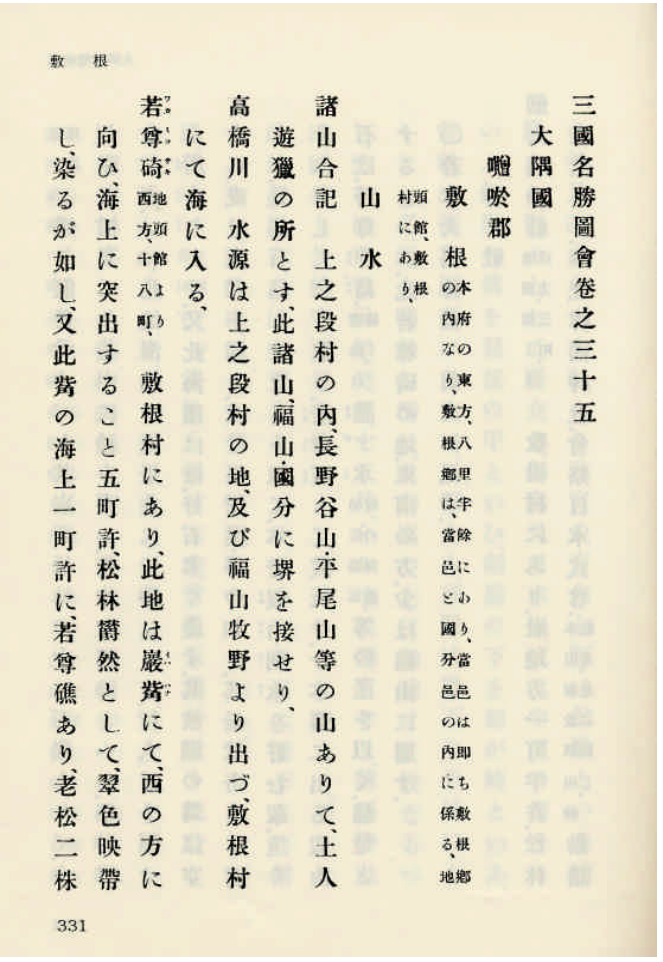
※ 私^私が意味の分からなかった言葉を漢和辞典等で調べ、それぞれの文章のあとに書きました。それでも不明な語句は勝手に意味を書いてみました。賢明なる皆さんのご指導をお願い致します。主に（？）の部分です。

※ 今後分かりやすい現代語訳（小中学生用）を作製する予定ですが、さらにご指導をお願いいたします。

【神宮司 耕二】

※ 参考図書

- 三國名勝図會（昭和五十七年 復刻版） 原口虎雄 監修・改題
- 大漢和辞典 諸橋漱次 著
- 大漢語林 鎌田 正 他著 大修館
- 広辞苑 新村 出 著 岩波書店
- 国語大辞典 小学館



(三國名勝図會より「敷根」の最初の部分)